

令和6年度 とくしま高齢者いきいきプラン策定評価委員会
議事概要

1 日時・場所

令和6年11月19日（火） 午後2時から午後3時まで
ホテル千秋閣 7階 鳳の間

2 出席者

委員30名中24名出席（代理出席含む。）

阿部明美委員、伊勢佐百合委員、上田輝明委員、遠藤彰良委員（代理）、
大下直樹委員、岡田あかね委員、喜多一之委員、酒巻英紀委員、
田蒔正治委員、田村修司委員、手束直胤委員、中谷哲也委員、中村忠久委員、
松尾恭子委員、松下恭子委員、南礼子委員、三宅武夫委員、保岡正治委員、
柳澤幸夫委員、山口貴功委員（代理）、山口浩志委員（代理）、
横山敦子委員（代理）、吉田貴史委員（代理）、米本正志委員

3 議事次第

- (1) とくしま高齢者いきいきプラン(2024~2026)概要について
- (2) とくしま高齢者いきいきプラン(2021~2023)に係る本県の取組状況について

4 議事概要

(1)(2)に関し、配付資料により事務局から説明したあと、次のとおり意見交換が行われた。

【委員】

資料2のうち、「主要介護サービス見込量」及び「介護保険施設入所定員総数」とあるが、全体的に介護認定を受けた方がどのくらい利用しているか、といった数字が見えない。提供する数字は1でも、実際にどれだけ公的な施設が使われているか。見込みと供給のバランスがベストにマッチングされているか、ということが1つ目。

2つ目は資料3の1「フレイルサポーター」に関して。フレイルサポーターを養成することは良いことだが、フレイル予防には落ちこぼれる方がたくさんいる。(フレイル予防教室等に)参加する方は意識もあり向上心を持っているが、本来参加すべき人が様々な理由でなかなかできない。目が見えないとか耳が聞こえないとかで、集まりに参加することが困難だと。そこで私の施設ではケア

ハウスを使い、地域住民に向けて実施しているが、こうした地域の医療機関等が持っている施設を利用すると効果が上がるのではないか。医師会や会員に対しては勧誘しているところだが、効果的な方法は何かないか、また検討いただければ。

3つ目に、9「介護事業所における介護ロボット導入事業所数」に関して。

最近介護現場の生産性向上がよく言われるが、医療と介護の連携について、情報の一元化がなかなかされていない問題もある。またスタッフ自身が、パソコンを触るのにアレルギーがある。

最後に、12「多職種との連携による住宅改修の点検を実施した保険者数」について。住宅改修に関連して選択制が導入された。国は予算がなく、効率のためにそういったことをやっている。払えるものは払いなさいという流れになっているため、そこを見抜いた上でこういったプランを進めていくべきでは。

【事務局】

見込みと給付の部分について、まずは、介護認定についてはプランに掲載箇所があるので、参考にさせていただきたい。また、実績については見込みとしてプランの後半に掲載しているが、それぞれのサービスごとに分けて記載しており、少し分かりづらい部分があるかということで、今後お示しする資料では、分かりやすい記載を検討したい。

また、今後のフレイルサポーターについて、より効果的な方法があれば協議させていただき、医療機関とも連携、協力しながら、効果的な部分を見つけていければ。

3つ目の生産性向上だが、介護職の方は平均年齢が高いこともあり、機械に不慣れな方もいらっしゃると思う。しかし、実際事業者さんにおいて徐々に導入を進めていき、最終的には負担軽減に繋がっているところなので、御理解いただきながら進めさせてもらえたら。

また、改修についてだが、社会保障費全体がずっと伸びてきているなかで、国においてもそのままに増加というのは難しい。しかし必要な部分は必要として、こういった会議の場で意見いただいたことを、国に提案できるよう進めていきたい。

【委員】

何年か前にお伺いした話に、タブレットを導入しても介護職員の年齢が高くなかなか使えないという問題があって、現在何か改善されているのかと。便利ではあるだろうが、使える人がいる状況になり、皆がそのレベルにいかない

と難しいかと思う。ロボットに関しては、リフトを介護現場で使うが、移動させるのに良いと言われても、扱いが難しかったりする。そのため導入した際のサポートや後のフォローアップが大事だと思うが、その点について教えていただきたい。

【事務局】

ロボットについては、導入したものの実際の事業所に合わず、使えないままのところもある、とも聞くため、今後については導入するにあたっての部分から、その後何が効果的か、また事業所で核となる方を支援していくといったサポートができるよう考えていきたい。

【委員】

ただ単に導入するだけではなく、その後の課題を把握してのフォローアップといったところ、お願いしたい。

【委員】

「認知症サポーター数」について、かつて低迷していたが、現在徳島県は第9位になっており、評価できる。企業や団体と連携して養成講座を開催したとあるが、どのような業態の企業か等、細かくデータを拾うことはできるか、公表できるか、というのが一点。

また、これだけ増えてきた段階で、認知症の人や家族が、本当に安心して、ひとり歩きができるといった地域づくりが大事だと思うが、例えば、お店に行った際に商品を手にして、そのまま支払わずに店を未払いで出てくる、といったことに対する認知症サポーターの対応とか、要は質的な問題ですね。これから重要になってくるのは、その方が認知症かどうか外見からはわからないので対応について悩ましいところもあるかと思うが、その辺を踏まえた「かもしれない」ところでの、対応する側の行動や言動、確認。業界それぞれに応じた、認知症の人が取るであろう行動に対する対応。今後はそういった質的なところで、サポーター養成研修を受けた方達に、さらにステップアップで受けていただくような研修も含めてやっていく必要があるかと。私たちもどんどんやっていきたいと思っている。どういった企業でサポーター養成研修をどの程度の方が受けておられるのか、データがあれば教えていただきたい。

【事務局】

小売りや販売、スーパー等が多いようだが、ホームページでこういった企業が参加されているか掲載している。

また、認知症の方への対応について、確かに認知症の方でそのまま会計をすり抜けてしまって窃盗犯と間違われてといったことも聞くので、各事業所で認知症への理解を深めていただく研修や周知が必要かと思っている。引き続き関係団体にも御協力いただきながら、企業にも認知症の方へのゆっくりした対応なり、窓口でできるところをやっていけるよう、今後理解を深められる形で進めていけたら。また研修での更なるステップアップについても御協議いただきながら、より良いサポーター支援が継続できるよう模索していけたらと思う。

【委員】

私の法人で2カ所のユニバーサルカフェを開設し、認定いただいている。

障がい者の生涯安心という場をどのようにして事業展開していったら良いかということで、年1回の審査を受けながらやっているが、ねらいをどこに置いて実施していけばよいか。各個人の生涯安心、利用者の生涯安心、それから地域を巻き込んでの生涯安心。工程表や方向性のようなものが見えるとそういった部分分かる。それぞれのカフェでは地域の方を呼んだり、一緒に研修をしたりと、いろいろなことを重ねていくわけだが、目標になる軸があれば、ユニバーサルカフェの生涯安心の場がより明確になっていくと思う。

【事務局】

ユニバーサルカフェについては、高齢や障がいのある方、外国人、子供さん、いろいろな立場の方が集い合える場所、皆さんと話をすることで、孤独や孤立を防止するだとか、また、認知症の話も先ほどあったが、利用される方それぞれの個性、悩みや経験を共有し、誰もが行きやすく、暮らしていけるような徳島を目指していくということで、ユニバーサルカフェの認証制度を平成28年度から設けているところ。安心してその場所に集えるよう、どういった方がよく利用されるかを見ていただき、相談業務に特化した方であるとか、認知症であれば認知症の方に対する認識がある方、そういった有資格者、勉強された方が参画していることも制度の認証をする要件としている。

「どこに軸足を置けば」ということだが、様々な方が利用いただく中で、利用される方にとって選択肢が多くあることが必要かと思っている。いかに皆さんが利用しやすいか、広く安心して使っていただけるかというところで認定している。例えば、新たなカフェとなっただけのために、今認定されている方同士だけでなく広く参加いただき、(カフェに)取り組める(きっかけとなる)ような研修といった、居場所が広がっていくような取組で、広くいろいろな認識を持っていただける場を作っていけたらと考えているところ。

【委員】

「いきいきプラン」についてだが、全国だと例えば認知症の病院で同時に障がい者の方もいるところ。子供さんを持っている母親や家族が遠方まで訪ねて来ざるをえない、ではここで作れば良いのではと、認知症施設の横に障がい者の施設を作った。こういった高齢者だけ、障がい者だけというのではなく、ごちゃまぜにした大きな組織。こういう発想を持っていかないと、これからの日本は残っていかない。子供をきちんと育てていかないと先もないので、子供の事を考えつつ、介護をされている親御さんの働く場所を考えつつ、トータルに地域で発展していくという発想を持っていかないと、縦割り行政だと「いきいきプラン」だけで終わってしまうので、実行していく必要がある。

私も例えば、介護老人福祉施設だけでなく、幼保連携型認定こども園や障がい者の子供の施設等をやっているが、そういった総括的な発想で、地域の様々な考え方の中で、「いきいきプラン」を発想していくことが、これから生き残っていく方法だと思う。

【事務局】

例えばヘルパーだと、高齢者向けの事業者が障がい者の対応をされたりと、比較的親和性がある。ただ、身体の障がいであればある程度高齢者に近い対応もあるかと思うが、知的障がいとなるとまた対応が異なってくる、ということもあり、一緒にするのはなかなか難しい部分もあるが、広くサービス提供ができるような事業者が今後増えていければ、総括的な発想といったところに繋がっていくと考える。

【委員】

従来の形だけではなく、新しい発想も含めた新たな取組を今後検討していく意味はあると思う。

【委員】

縦割りではない、分野を跨がった視点を取り入れていかなければいけないというところに、私も強い考えがある。

ユニバーサルカフェの例にも出たが、今不思議な現象として、例えば地域食堂で言うと、ボランティアで加わっている方が70、80代、食べに来られている方が60代で、活動されてる方が若く見えるといったことが多数見られてきている。子育て支援の地域の居場所サロンのような場であっても、ボランティアとして関わる方が地域の現役シルバーで、60から80代の方がおられる。そこに未就園児を中心とした子育てファミリー層の方が参加し、子育ての悩み

を自分の親以外からアドバイスを受けたりと、安心できるような居場所になってきている。こういった場所を、例えば、ボランティアをされている高齢者の方にとって、どういう生きがいになって、どういう効果が出ているか、また、子育てファミリー層にとってどんなプラス面が出ているかとか。それぞれの立場に立った視点からの検証を総合的に見ると、多様な場がもたらす効果が見えてくると思う。こういったユニバーサルカフェの整備を進められていることで、実は徳島県の中にもたくさん出てきていると思われるが、そういった視覚的な検証がまだ進んでいないと感じるので、県の方で取り上げ、効果測定を可視化させるような働きも合わせて行っていただくことで、よりユニバーサルカフェのような多様な関わり、子供・障がい・高齢といった立場を跨がったことで起こってくる、地域づくりをより深く進化させることができると思うので、お願いしたい。

【事務局】

整備するだけでなく、こういった効果があるかを可視化していくというご意見をいただいたので、検討させていただけたら。

また、ユニバーサルカフェ自体の整備を進めていくなか、さらに様々な方法で開催している方がいる。そういったところも県としては認証制度を使い、県のホームページ等で発信させていただいているが、より広くいろいろな方に見ていただき、こういう形がユニバーサルカフェでいいんだと、新たにやってみようかと思っただけの方も増やしていく。そして、今までなかなか出て行かれてなかった方が行ってみようかなと思える形での発信も取り組んで参りたい。

【委員】

シルバー大学校大学院の資格取得者数が非常に増えているということで、昨年度私達の地域でも、卒業された方を地域のボランティア活動で派遣いただいたが、専門知識を習得され、社会貢献活動を推進する人材、リーダーといった要素を担われた方が力を貸してくだり、本当に助かった。その反面、そういった地域の中でいろいろな活動をされている方と、接点を地元で持っていなかったということに、どうして今まで繋がらなかったのかということが出てきた。

卒業された方が知識も備えられ、リーダーの資格としての確な方がたくさんおられると思うが、実際その地域、市町村単位で見たとき、なかなかその地元の活動として結びつきづらいものがあり、そこが繋がっていくと、今不足している地域の地域福祉を担っていくリーダー、高齢者の学びの場を活用された、卒業された方の活躍の場が増えていくと思う。養成講座はたくさんあるが、卒

業された方が実際に学ばれたことを活用できる場に繋げることが、本当の目的だと思うので、県域から市町村単位に情報を繋げ、その情報を市町村の方できちんと受け止め、そういった方々に活躍していただく場に繋げていく。その橋渡しができれば、このシルバー大学校大学院のシステムは非常に有効なものになってくると思うので、検討いただければ。

【事務局】

とくしま“あい”ランド推進協議会において、「アクティブシニア地域活動支援センター」という、シニアで貢献されている方が登録されているシステムがあるが、そこを活用してということで、いただいた御意見を“あい”ランドにおいて協議し、市町村にどういう形で繋げ、そういった方と接点を持っていくか、今後検討させていただけたら。

【委員】

生きがいきづくり推進員が派遣されたと思うが、こういった分野の人か。

【委員】

通訳ボランティア。防災訓練に外国人の方が来られ、通訳の部分で不安があったので来ていただいて本当に助かった。

【委員】

褒めていただき、ありがたい。

【委員】

もったいない、もっと活用できればなという思いがあったので。

【委員】

仕組み的には、防災とか外国語の通訳も含めて、小学校のICTであったり、そういう分野で大学院を卒業しているので、おっしゃる通り縦割りとなっている。それも県単位での縦割りなので、行政とも共有させていただき、地域の横の繋がりといったものがないかどうか、検討させていただきたい。

【委員】

皆様がおっしゃられたことに共感している。第9期における取組は、同様に数値目標で判断するようになるのか。

【事務局】

基本的には数値目標を立て、実績が伴ったかどうか、今回は資料3で示しているような形で、効果検証をさせていただけたら。

【委員】

となるとおそらく第9期も同じようなことをやり、同じような人数で、何%どのくらいと。今回は我々が言うような、内容にも踏み込む評価を考えてほしい。

また、フレイルサポーター、認知症サポーターとあるが、実際に介護の現場では、認知症のある人もフレイルがある人もいて、分けて考えることが難しい。フレイルサポーターの方に認知症の基礎講座をつけるとか、認知症サポーターにフレイル予防の体操をつけるといったメニューを考えていただければ。

また、ICTと生産性の向上について、介護する方の年齢が非常に高く、導入すると高齢の介護士さん達は辞めるといふ。ICT導入も良いが、そういった、人に対する指導といったことも考えていただければありがたい。

【事務局】

フレイルと認知症についてだが、理学療法士会に相談し、フレイルに関する対策は認知症の方にも活用できるのではないかと、そういった効果検証が見込めるのなら、フレイル予防で行っている運動を、認知症の方にも広げていくといったことは考えているところ。

また、ICTについては、別の方法にはなるが、本来の身体介護をさせていただき介護職の方から、配膳やベッドメイキングの周辺業務を切り分け、介護助手という形で負担軽減を図る。ICTの導入に御理解いただけない部分については、1つの方法になるかと。ただ、最終的には最近の機器の発展も著しいこともあり、たちまちスマホで使えたり、口頭で言った部分そのままが変換されるといったこともできるようであり、さらに使いやすいICT、高齢でなかなか機器が使いづらいと思っておられる方にも使えるものが今後できてくるのではないかと考えている。

【委員】

そういったアプリ、プログラムができるのであれば、県からも発信していただきたい。